遺跡現地説明会資料　　平成28年３月26日（土）

原遺跡 第22次調査

太宰府市教育委員会 文化財課

原遺跡は、四王寺山の南東麓に広がる遺跡で、一帯に「原山」または「原八坊」と呼ばれた山岳寺院があったと伝えられる場所です。

本調査地は原遺跡の中心部である伝本堂跡の東端にあたり、調査の結果、造成された土の高まり（壇）と巨石を用いた石垣、さらに参道と考えられる道路遺構を確認しました。

遺跡名：原遺跡 第22次調査
所在地：太宰府市三条１丁目1518-1ほか
調査期間：平成27年10月～平成28年3月
調査原因：道路の拡幅
調査面積：約120㎡
標　　高：約79～81m
遺跡の年代：13世紀頃
遺跡の種類：寺院と道路
主要遺構：石垣・石列・礫敷き道路状遺構
主要遺物：土製（瓦質）五輪塔土製懸仏、青白磁（羊形装飾）等

図１ 調査位置図

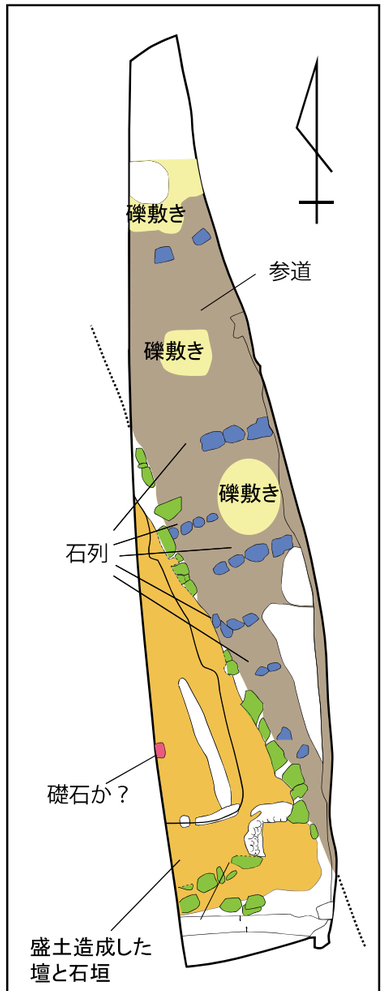


図２ 遺構概略図

【遺構】

道路（礫敷き、石列）

礫敷き　東から

石列と石列の間には、拳大の礫が敷かれていました。本来は全体に礫が敷き詰められていたものと考えられます。

石列　南から

およそ２m間隔で階段状に石列が配置されています。残存状況から1列は幅４m以上あったと考えられます。

造成した壇と石垣

壇　南東から

土を盛った壇状の高まりです。その上には、礎石とも考えられる石を確認しています。

石垣　東から

壇の斜面には巨石を用いた石垣が築かれていました。南側斜面にも巨石をいくつか確認しており、壇の周囲を巡っていたものと考えられます。

原遺跡（原山）とは

太宰府市字原に原山無量寺があったとされています。その起源は『筑前国続風土記』や原山記念碑から、９世紀に創建された天台宗の寺院とされます。

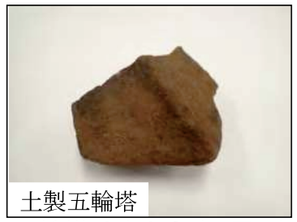
中世に入ると文献史料に「原山」の記述がみられ、その活動をうかがうことができます。発掘調査からは、平安時代後半（12世紀前半）の礎石建物・石垣を確認しています。12～13世紀代に整地が行われるほか、建物や井戸、溝などがみられます。出土する遺物はこの時代のものが多く、最も盛んに活動が行われた時期と考えられます。また、14世紀後半には衰退し、ほとんどの堂舎は廃絶したものと考えられています。

原山無量寺古図

江戸時代に描かれた原山です。中心に見える本堂（伝本堂跡の東端）が今回の調査場所になります。

【遺物】

おもに、土師器、白磁 龍泉窯系青磁、同安窯系青磁の破片が出土しています。中には、土製五輪塔や土製懸仏といった寺院に関係する遺物も出土しています。


土製五輪塔

五輪塔は上から空・風・火・水・地の部位に分けられます。写真は火輪（屋根形）の軒の隅にあたる部位です。

土製懸仏

仏の膝の部分です。膝の下には蓮華座が表現されています。

青白磁（羊形装飾）

長さ約４cm、高さ約3cm、幅約２cmの羊を模した装飾です。壺や蓋に装飾されていたものと考えられます。

まとめ

今回の調査で伝本堂跡から、造成された壇が見つかり、壇の斜面には石垣が築かれ、さらにその東には南北に南北に延びる道路（礫敷き・階段状の石列）を確認しました。また、出土遺物には寺院に関係する土製の五輪塔や仏像を確認しています。

以上から本堂跡に関わる遺構である可能性が強く、原遺跡を考える上で大きな成果を得ることができました。